

時評

三島の遺伝研におられたイネ研究の大家、岡彦一先生がなくなって今年で十年になる。私は先生の直接の弟子ではなかったが、毎日同じ研究室にいている



佐藤 洋一郎

(総合地球環境学
研究所教授)

いる。指導を得ることができたのは実に幸いであった。特に旅行さえ困難な熱帯での実地調査のノウハウを徹底的にたたき込まれたが、その実地調査ももう

植物は今や「資源」

四半世紀になる。

五月末から、カンボジアの奥地、国の東部から北東部のラオス国境での調査に参加している。今回は現地からのレポートである。調査隊は、弘前大の石川隆二助教授を隊長とし、千葉大の中村郁郎助教授、弘前大の大学院生、本間照久さんと私、そ

訪れたとき、プノンペンでは夜ともなると銃声が聞こえた。調査が終わりホテルの部屋に入っ

て、はじめてその日一日の無事が実感できた。メコン川にかかる橋は一つもなく、移動は「渡し」にするしかなかった。今回プノンペンは観光客であふれ、メコン川にかかる橋も一本は完

の撤去は遅々として進まず、自

転車やバイクの轍の上を、綱渡りのように歩きながらの調査が続く。今までの私たちの経験から、開発が進むと野生イネは急速に

野生イネの保全に取り組み

た。今後はこれらの保全を、カンボジアの研究

れに現地の研究者など八名からなる。石川さんも中村さんも私の遺伝研時代の後輩、同僚だった人たちで、「岡スクール」は今や日本中に広がってその研究を受け継いでいる。

成し、もう一本も間もなく完成する。道路の整備もすすみ、ラオス国境にも意外と簡単に行きつくことができた。この国は変容した。

しかしそれでも、沼地に生える野生イネの調査にはまだ細心の注意が求められる。人口の数倍とも数十倍ともいわれる地雷野生イネの株を、タイのバンコ

執筆者略歴

クの研究所に持ち込みそこで分析するスタイルに変えた。それが今や野生イネを含む植物は「資源」と位置づけられ国外持ち出しはできない。採集した株はプノンペンの研究所に持ち込み、そこでDNAなどの分析をするようになる。その研究資料の援助も私たちの仕事なのだ。岡先生がご存命ならば何と言われるであろうか。

さとう・よいちろう氏

京都大学大学院農学研究科修士課程修了、静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。